受肉

知っておきたいキリスト教のことば　(96)



「受肉」という言葉は、あまり聞きなれないものです。キリスト教ではイエス・キリストが肉体を受け、人となったことを言います。

ユダヤ教などでは、霊と肉とをはっきりと分けて考えていました。創世記で神さまは人間を創るとき、鼻から息を吹き込みます。肉（肉体）に霊である息が吹き込まれたのです。

そしてパウロは、肉は罪の象徴であるといいます。受肉とは神の子であるイエス様が、その罪の象徴である肉を持たれたという意味を持ちます。神さまは人間の歴史に介入するために、イエス様をわたしたちの間に与えられました。その理由を聖書はこのように伝えます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネによる福音書 3 章 16 節）

神さまはわたしたちを愛するが故に、わたしたちの間にイエス様を顕します。そのイエス様を救い主と告白し、受け入れることが信仰なのです。

それではイエス様は、神さまなのでしょうか。人間なのでしょうか。この議論は、初期キリスト教の時代から活発になされてきました。教理上では、一つの結論が出されています。

それによると、イエス様は完全な神性を持つと同時に、完全な人性をも持つということです。頭で考えても、どういうことかよくわかりませんが、わたしたちにとって大切なことは、「神の子であるイエス様が人間になられた。だから人間であるわたしたちの痛みや苦しみを、すべて理解してくださるのだ」ということなのです。

次回は「主の祈り」です。お楽しみに。